

新しい鯨

日本人の記録

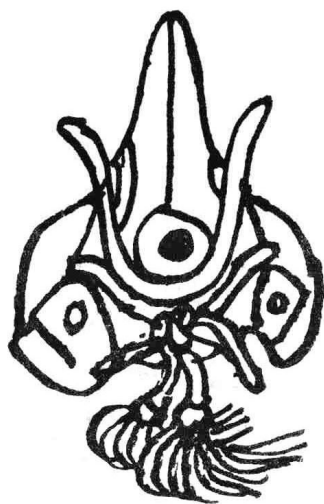
村松 喬



毎日新聞社

新しい鯨

日本人の記録



村松 喬

著者略歴

村松 喬（むらまつ たかし） 大正6年
静岡県生まれ。早大文学部英文科卒。毎
日新聞東京本社学芸部長。主な著書「落
日のマニラ」「異郷の女」「オンリー・ユ
ー」「脚光」「椿の女」

新しい鯨 日本人の記録 《検印省略》

昭和39年5月25日 印刷
昭和39年6月1日 発行 価 380円

著 者 村 松 喬

発行者 高木金之助

印刷所 中央精版

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町 1～11
大阪市北区堂島上 2～36
北九州市門司区清滝町 1～902
名古屋市中村区堀内町 4～2

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

「新しい鯨」に寄せて

名古屋市長 杉 戸 清

村松喬さんの「新しい鯨——日本人の記録」が、このほど上梓されることとなった。

すでに新聞紙上に連載されていた当時から、多くの愛読者をもっていたこの小説が、このように立派な一巻としてでき上ってみると、改めて、その内容の見事に敬服せざるをえない。

戦後の名古屋の復興史上に、輝かしい金字塔をうちたてられた田淵さんの足跡——それは今日、世間から賞揚される名古屋の発展ぶりの、尊い礎を築かれたものであるが——を、かくまで多面的に取上げ、また人間の内面性に深く触れて描かれたものは、極めて少ないのではなからうかと思う。

かかる一書をまとめられた、村松さんの才筆と、そのご苦心のほどに、満腔の敬意を表するとともに、本書を、すぐれた人間の活動の記録、精神の歴史として、かつまた、都市づくりの参考として、万人のご一読をおすすめしたい。

「新しい鯨」と私

田 淵 寿 郎

今日ほど都市計画の重要さが強調される時代はありません。それは、集団としての個人生活の基盤になるものだからです。私が名古屋の都市計画に手をつけるようになったのは、ほぼ二十年前、ふりかえってみると感慨無量のものがあります。

「新しい鯨」は、いわば、私の過去帳であります。単に、回顧するという意味でなく、あすにつながる都市計画のあり方を、私に教えてくれます。執筆された村松記者のご苦勞はたいへんなものだったと思います。私自身がとくに忘れてしまっていたことを、よくもここまでと、おどろく次第です。

話の筋からみますと、私が主人公になっておりますが、都市計画というぼろ大な仕事は、チーム・ワークがあつてこそできるものであり、その点、私は、手足となって協力してもらつたみなさんに感謝します。人材にめぐまれていたことが、私にとってこの上もない幸せなことでした。もうひとつには、私たちのムリを聞いてくださった名古屋市民のみなさまにお礼を申しあげます。とくに、墓地移転という、ある意味での宗教革命が、スムーズに行なわれたことこそ、名古

屋市の都市計画を今日まで発展させたものと信じます。

いま、私のいままでの仕事をみつめてみると、ああしておきたかった、こうしておきたかったという反省がいろいろ思いだされます。この点については、私の後輩にお願いする次第であり、また、解決してくれるものと思います。

私は現在、三重県長島一帯の都市計画の仕事を手伝っております。これまでの経験を役立たせ、五十年後、百年後の日本の姿を考えて、すこしは、ましなものをつくろうと考えています。そういった意味でも「新しい鯁」は、私が気がつかなかった、いろいろなことを教えてくれます。

毎日新聞社から「新しい鯁」が単行本として出版され、私の喜びは、これ以上のものはございません。私の仕事に協力してくださった高間宗道師はじめ、みなさま方に、重ねて感謝とお礼を申しのべさせていただきます。

目次

「新しい鯁」に寄せて
「新しい鯁」と私

杉戸 清
田淵 寿郎

旅路の終り

出馬

中京

覚王山の寮

計画

快僧

心の問題

抽象と現実

九 三 七 六 五 四 三 二 一

春の芽
願　い
前　進
いまと未来と

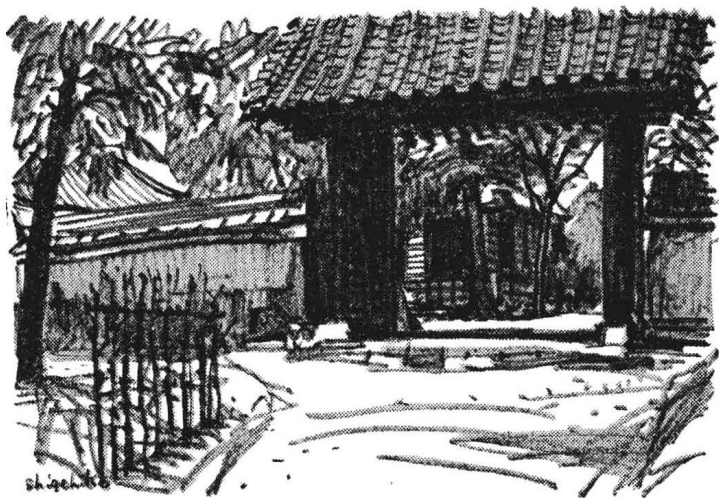
あとがき

一七一
二〇二
二〇三
二〇七
二六九

装画・さしえ　石川滋彦

新
し
い
鯨

日本人の記録



旅路の終り

五月の明るい太陽が小高い丘いち面に躍るよう
に輝やいていた。丘に上る小道の両側は深く繁つ
た林にかこまれ、深い蔭^{かげ}があたりを覆^{おほ}っていた。
空気は澄んでいたが、重苦しかった。それはとき
どき飛行機の爆音を遠くから響かせ、戦争の重荷
にいまにも押しつぶされようとしている人びとの
心に、圧倒的な力でのしかかってくる空気だっ
た。

林の間を上っていくと、小道は少し開け、その
つき当りに山門^{はとまり}があった。埃^{ほこり}っぽい赤土の上に建
った小さな山門^{はとまり}を入ると寺の境内で、本堂と庫裡^{くら}

が間近に迫って見える。それが三重県豊津上野の円光寺であった。北支から帰ってきた田淵寿郎は、その荒れた寺のたたずまいを深い感慨で見ないわけにはいかなかった。

彼は長い旅の末、この地点にたどりついたのだった。それは大陸から帰ってきた旅の終りであったし、また彼の長い人生の終着点でもあった。田淵は旅を終えた人間の感じるほっとした安心と、行きつくところへ行きついてしまったある種の不安感を同時に感じていた。あたりは汗ばむくらいの空気だが、田淵は「これがまあついのすみかか雪五尺」という一茶の心境に似たものに陥ったのである。彼は沈みがちな心をどうすることもできなかった。しかし彼は自分の気持をして引き立てようとも思わなかったし、その努力をする必要も彼にはなかった。

彼にとって、人生のすべてがもう終っていた。彼はひとつの生涯を生き抜いてきてしまったのだった。彼がいま立っているところは、もちろん出発点ではないし、途中でもなく、明らかに終点であった。終点の先になにが残されているか。なにもないはずであった。その旅路の終りを、未知の土地に、尋ねて、さがし当ててきたというのは、彼のこれから先の生き方を象徴しているようでもあった。彼が生きてきた生涯は、内務省の土木技師という軌道の上であった。その軌道を彼は誤りなく正確に、しかも順調に走ってきた。そしていま、彼の前には走るべき軌道は敷かれてはいない。

田淵の心は沈んではいたが、絶望しているわけではなかった。いまの彼の境遇はなかば彼が求

めたものであったからである。三十年の土木技師の生活は、仕事と、そして昇進という当然だれにでも与えられる道筋と、その上につけ加えるならば、仕事の上に残してきた業績に対する自負と誇りであった。

彼の内務省の役人としての最後は昭和十四年三月から十七年五月までの名古屋土木出張所長であった。それから三年間、彼は北支にあった華北政務委員会の建設総署技監といういかめしい役目、いわば建設省の技術担当次官というところで、日本の役人としてではなく中国の役人として黄河を相手に働いてきたのだった。彼はその前に昭和十三年三月から十四年三月までいち年間上海の戦災復興のために上海特務部に勤めたことがあった。中国は彼の心に深くくい入っていた。そこで職を離れるのは三十年の歴史を閉じる場として彼にはふさわしいように思われ、それを実行したのだった。

三重県豊津上野は名古屋から南へ近鉄電車で四十キロほどのところにある。伊勢湾に面した海岸から二キロ足らず、国道二十七号線をはさんだ田圃^{たんぼ}が尽きて丘陵^{すそ}にかかる裾に、細長くひと筋の村落があり、円光寺はその背後の丘の上にあった。

円光寺はそのあたりの領主だった別部左京守の菩提寺^{ぼだいじ}で由緒^{ゆいしょ}のある寺であった。禅寺で万松山円光禅寺という。本山は京都の東福寺で、尼寺であったが、住職の尼僧がわけがあって京都へ引きあげて以来、寺は無住で庫裡もあいていた。そこへ田淵の家族が名古屋から疎開してきていた

のだった。

三年間の北支の生活を終わり、帰ってきたところが見知らぬ土地であったことは、田淵には多少戸惑い気味であったし、華北政権の高官の生活から、いっ拳になんの特権も手づるもないいっ介の疎開者の生活に入^はったことはいっ層彼を戸惑いさせた。三年間の留守中に日本の事情はいっ変していた。妻の常代をはじめ子供たちは食糧の不足、その不足をどうして補うか、などの戦争下の生活に馴^なれていて、いっ瞬のうちにその生活を身につけなければならない田淵の、なにごとも目新しい驚きに同情したり笑ったりした。

「なあに、いいんだよ。私はもう隠居なんだからなんでもするさ。むつかしいことはいわない。直接食うために働くというのもいいじゃないか。働かざるものは食うべからずという言葉は残酷なひどい言葉だが、いまこそそのような時だと思うね」

役人をやめた田淵は自分を全く隠居だと思っていた。先の見とおしがあるわけではないのだから、当面隠居以外なんの暮らし方もないのだった。戦争は破局へ向かって猛烈な勢いで突き進んでいく。その時に老骨になにができるというのか。土木といっても、国土は破壊されていくいっ方の時、なにができるだろうか。彼には隠居がふさわしいのかもしれない。五十五歳の男にしては、その考えは或いは余りにも老人めいていたかもしれないが、昭和二十年の五月という月は、そんなことを考えさせる月であったかもしれない。昭和二十年の五月は、過去のどの年の五月と

も、また将来のどの年の五月ともちがっていたというべきであつたろう。それは国が破滅する寸前の五月であつた。太陽は照つても、その輝やかしさ、美しさをだれひとり楽しむ者もない暗い五月であつた。人は苦しみあえいでいた。しかもなお戦争は勝たねばならぬと思つていた。その時に田淵は職を辞したのだった。

五十五歳という年は、日本人にとってはひとつの生涯の終りである。男は彼の人生のすべてを、彼が学校を卒業した年から五十五歳までの三十年間に投入しなければならない。いわばその三十年が人生そのものである。その三十年が、彼の持つてゐる生命の時間を通してしまふと、自由ではあるが責任もない世界に放り出されてしまふ。三十年の経歴は彼に或る保障を与へはするが、最早彼はなにごとに関しても原動力でもなく実行者でもなく、影響力ともなり得ない、過去の人となり終るのであつた。残された時間は余命であり、なんの意味もない。田淵のいう隠居も、それと余り変わった意味のものではなかつた。

疎開地の生活は田淵にとってそんなに苦しいものではなかつた。むしろ彼は、いつ生つづくかもしれない長い休暇を楽しんだといった方が當つていた。伊勢の自然は穏やかで親しみがあつた。円光寺の庫裡の横手に出ると、いち面の青い田が展が^{ひら}つてゐる向こうに、遠く松林が見え、その向こうに伊勢湾が乳白色に煙つていた。寺の裏山は浅い谷と低い丘が波のように連らなり、赤松の林が丘を覆つていた。遙か彼方の鈴鹿の山波に夕陽が沈むとき、その金色の光に映えて、

柔和な線を画く赤松の幹がさらに赤味を増す風景は、大陸のどこともちがう日本そのものであって、田淵の心を慰めた。

無住であった円光寺は荒れ果てていた。境内には雑草があたりいち面にわがもの顔に生い茂っていた。疎開地のだれもがやったように、田淵も寺の裏庭を開墾してイモやソバを作った。畠仕事は馴れないことだったが、背も高く頑丈なからだの彼には苦しいことではなかった。明治の末から大正のはじめにかけて、それは彼の熊本五高から東京帝大の学生時代、彼はずっとボートの選手であった。東京帝大では東竜太郎が同じ選手の仲間にいた。ボートで鍛えたからだ、がんばりの精神力が後年の田淵を貫くひとつのシンとなっていた。

野菜が少しずつ成長していくのを見守っていると、それがあとで空腹を満たしてくれるのだと思うより先に、彼は園芸的な楽しみを感じるのだった。それは田淵が畠作りのしろうとだからで、くろうとの農民はそんな非現実的な楽しみ方はしないだろう。彼らはできぐあいから売り値の計算に頭が働くはずであり、その方が正しい。

草いきれの中でシャツいち枚になり、畠仕事に励むのは田淵の楽しみであり、隠居にはふさわしいことに思われた。ひと仕事終り、庭の隅の石に腰を下して息を入れていると、いつの間にやってきたのか、裏の竹やぶの中から数人の子供たちの賑やかな声が聞えてきた。見ると竹やぶの中にいっ本の大きな木があり、子供たちはつきつぎに木に登りはじめている。丘の下の子供